



多くの蝶採集者が訪れる冠高原

人生の岐路

廿日市市吉和の山口県境に冠高原という小さな草原があります。この草原は国内でも有数の蝶の生息地で、なかでもミナミアカシジミという蝶はここでしか見つからない珍種です。そのミナミアカシジミを求めて、六〇七月には日本全国から多くの採集者やカメラマンが集まってきました。その冠高原で一人の青年に出会いました。多くの採集者が最新式のカーボンファイバーでつくられた捕虫網を持っているのに対して、彼は私が中学生の頃に愛用していた竹製の捕虫網を持っていました。今どきの若い人がこんな古いタイプの捕虫網を持っているのは珍しいなと思って、彼に声をかけてみました。すると彼は私の声かけに気さくに応じてくれて、長い間二人で立ち話をするようになりました。

青年は二〇歳代半ばで、東京の出身です。子

どもの頃から蝶が好きで、将来は蝶の研究で生計を立てたいと思っていたそうです。しかし高校卒業後の進路で親と対立し、そのまま家を飛び出して各地を転々とし、広島に来てからは介護の仕事をしながら、休日には蝶の採集に出かけるという日々を送っていました。しかし蝶の友人から茅葺き職人を紹介され、茅葺きの魅力に惹かれて、介護の仕事を辞めてその職人に弟子入りしました。現在は茅葺きの見習いに忙しい日々を送りながらも、空いた時間をみつけると蝶の採集に出かけているそうです。長い間彼女と一緒に住んでいたのですが、彼女が彼の生き方を受け入れることが出来なくなって別れたことも話してくれました。

私が「ここまでどうやって来たの？」と聞くと、彼は「これで来ました。」と言って、道路脇に駐めてある一台のスーパーカブを指さしました。郵便の配達などに使われているおなじみ

のバイクです。そのスーパーカブの荷台には捕虫網の竿がセットできるように工夫されています。私は彼が住んでいるアパートのある東広島から山口県境の冠高原まで、スーパーカブで来たと聞いてびっくりしました。東広島から冠高原までは高速道路を利用して車で移動しても二時間ほどかかり、とても一般道路をスーパーカブで移動できる距離ではなかったからです。彼は「どこへ行くときもこの愛車と一緒にです。」と使い古したスーパーカブを軽く叩きながら屈託のない笑顔で答えてくれました。

私は彼と話しながら、一人の友人のことが頭をよぎりました。その友人は中学校の集団生活や親の束縛に嫌気がさして、中学校を中退して鹿児島県の屋久島に移り住みました。その後、屋久島や小笠原でアルバイトをしながら蝶や植物の撮影・研究に没頭し、やがて上京して多くの写真集や図鑑を発表しています。今、その友

人は中国に住んで経済的にはぎりぎりの生活を
しているようですが、好きなことに精一杯打ち
込める時間と自由を持っています。冠高原で出
会った青年や友人の写真家は十代半ばで人生の
岐路に立ち、親の意思に逆らって進路を自分自
身の意思で決めました。もし彼らが親に逆らわ
ずに大学に行って就職していたら、今頃はどん
な人生を送っているだろうと考えてしまいました
た。そして苦勞しながらも好きなことをして生
きている彼らを、少し羨ましくも思ったのです。

「もう少し蝶を探してみます。」とあって、
青年は竹製の長い捕虫網を持って草原に向かっ
て行きます。私は一生懸命に自分の人生を歩ん
でいる彼の後ろ姿を見つめながら、「これから
の彼の人生に幸多かれ」と心の中でエールを送
りました。



ミナミアカシジミは世界中で冠高原にしかいない珍蝶です



ジョウザンミドリシジミは森の宝石と呼ばれています